

2024年度(令和6年度)学校評価自己評価表

城北中学校区	校番56	福山市立久松台小学校
最終更新日	2025年(令和7年)2月26日	

I 福山市

<p>ミッション 福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。</p> <p>ビジョン 「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、学校・教職員が自主性・自律性を発揮し「学校文化を変える仕組みをつくる」「子ども主体の学び」向かって自ら・ともに「鍛える」「支える」</p>
--

II 中学校区

<p>前年度学校関係者評価の主な内容</p> <p>学校関係者評価報告書は全項目「十分満足できる」と評価された。中学校区で連携を深め、共通の取組で成果をあげている。各校の目標が達成できていないものについては取組の進捗状況を細かく把握し課題克服に向けてPDCAサイクルに則り実践する。</p>	<p>児童生徒の現状</p> <p>全国学力調査の結果、校区小学校は福山市の平均正答率を上回ったが、本校は下回る結果となった。また、長欠未然防止に向けて、現状や対策を話し合い、実践した。さらに、メディアウィークを設定することで、メディアとの付き合い方や利用の仕方について効果があった。</p>	<p>育成する力 21世紀型“スキル&倫理観”</p> <p>めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)</p> <p>中学校区として統一した取組等</p>	<p>知識・技能 思考力・判断力・表現力 主体的に学ぶ力 他者とかがわる力 社会貢献力 自己形成力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自ら考え、判断し、行動できる自律した児童生徒 ・豊かな心を持ち、お互いを尊重し、人を大切にする児童生徒 ・校区合同研修における、合意形成を意識した授業研究及び教科等部会の取組 ・DC教育を基に、ICTを活用した個別最適化した授業実践及び協議・交流の取組 ・家庭での効率的な学習計画の立て方・メディアとの付き合い方への取組 ・合同行事や乗り入れ授業、「総合的な学習の時間」交流会の取組
---	--	--	---

III 自校

<p>ミッション</p> <p>未来を切り拓く「生きる力」を育成する 「すべては子どもたちのために」を基底に据え、学校・保護者・地域が連携し、「この学校へ来てよかった」「この学校へ来てさせてよかった」といわれる学校に</p>	<p>育成する力 21世紀型“スキル&倫理観”</p> <p>めざす子ども像</p>	<p>思考力・判断力・表現力 Ⓔ</p> <p>他者とかがわる力 Ⓕ</p> <p>自己効力感 Ⓖ</p>	<p>自分の考えや経験を基に自己決定したり、じっくり内省したりして、自律に向かうことができる。</p> <p>受容的で率直な対話を通して、互いの考えの共通点を見つけたり、新たな気づきを得たりすることができる。</p> <p>自分の良さを認め、難しいことでも失敗を恐れずに挑戦しようとしている。</p>
<p>学校教育目標</p> <p>自ら考え 正しく判断し 行動する 感性豊かな子</p>	<p>テーマ</p> <p>自分で決めて、やってみて、考える ～自律を促す学びの創造～</p>	<p>研究</p> <p>内容等</p> <p>「目標設定」「ふり返し」に全校で取り組める環境づくり ①単元のはじめに既習をふり返し、単元でつきたい力を見通す。 ②単元の終わりに、児童がふり返しを残す。 ③教材研究日(毎週月曜日)に、教員間で①と②の取組を交流する。 ④自主学習計画表と自主学習ノートの交流に、継続して取り組む。 ⑤校内研修毎に、教員一人一人が自分の「やってみよう」を決めて確実に取り組む。</p>	<p>めざす授業の姿</p> <p>Ⓔ 自分で決めて、やってみて、考える機会を保障した授業 Ⓕ 児童が、自己決定したり、じっくり内省したりする授業 Ⓖ 教師が、児童の実態からの確なファシリテートをする授業 Ⓖ 受容的で率直な対話を通して、新たな気づきを得られる授業 Ⓖ 課題に対して自己決定や自己選択することができ、子ども達が進んで挑戦できる授業</p>
<p>現状</p> <p><テストで測れる学力>(全国学力・学習状況調査等の結果より) 【〇成果 ●課題】 ○全国学力・学習状況調査の「国語・算数」では全国平均・県平均を上回り、基礎的・基本的な学力はおおむね定着している。また、無回答率が低かった。 ○授業づくりで、友達との対話や図化などの意見を説明し合う場面を多くしたことで、児童の主体性を伸ばすことができた。 ●国語科で、提示された全ての条件を満たして書く力が弱い。 ●算数科で、二次元の表など、多くの情報の中から必要な情報を見つけ出す力が弱い。</p> <p><非認知能力>(2023年度末に職員で分析した児童の実態より) 【〇自律に向かっている姿 ●自律から遠ざかっている姿】 ○自分の考えをもち、なおかつ他者にそれを伝える力が伸びている。 ○自主学習への主体性が昨年度よりも伸び、自律に近づいている。 ●自己の伸びや課題についてのメタ認知や、それをやる習慣や、メタ認知のための語彙などが育っていない。</p>	<p>めざす授業の姿</p> <p>Ⓔ 自分で決めて、やってみて、考える機会を保障した授業 Ⓕ 児童が、自己決定したり、じっくり内省したりする授業 Ⓖ 教師が、児童の実態からの確なファシリテートをする授業 Ⓖ 受容的で率直な対話を通して、新たな気づきを得られる授業 Ⓖ 課題に対して自己決定や自己選択することができ、子ども達が進んで挑戦できる授業</p>		

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立久松台小学校

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)					
							□指標に係る 取組状況	力 セ ス	達 成 評 価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	力 セ ス	達 成 評 価	総 合 評 価	改善方策
3	自ら考え学 ぶ児童(主体 性)の育成	★	継続	自己決定して行 動し、そこから 前向きに学びを 見出す、自律し た児童の育成	授業で、児童一人 一人が自分で選 ぶ場面を保障す る。児童と、単元 のはじめに既習 の振り返りを行 い、単元目標を立 てる。自主学習の 振り返りや交流 を月に1回行い、 次月のめあてを もつ。	「自分の振り返 りをもとにして、 次の『やってみよ う』を見つけてい る。」と答える児 童の割合を、各学 級90%以上に する。	□アンケート項 目に肯定的に答 える児童は7 4%だった。自 分の成長や次時 を意識した振り 返りが十分でな かった。また、振 り返りの視点が 明確でなかった ため、どのよう に振り返りを書 けば良いのか、 書き方がわから ない児童がいた。	3	3	2学期以降は、 振り返りのモ デルを設け、視 点を明確にす ることで児童 に目標を設定 させたり、振り 返りを通して 自分の頑張り を自覚させたり していく。	□アンケート項目に 肯定的に答える児童 は83%だった。2学 期以降は振り返りの モデルを設け、視 点を明確にして振り 返るようにした。 ◎久松台タイムで振 り返りの交流を異学 年同士で行うこと で、振り返りの意 識を高めたり、自主計 画表を振り返り目標 を設定する時間を設 けたりすることで、 前向きに学びを見 出す児童が増えて きた。	4	3	3	引き続き、振り返り から目標設定が行 えるようにモデル を活用していく。ま た、児童の姿からよ り具体的なモデル を作成していく。そ して、研究テーマを 見直し、「対話」や 「書くこと」などに 焦点を絞って取り 組むことで、自ら考 え学ぶ児童を育成 していく。
			継続	自分の良さに気 付き、自信をも って物事に挑戦 できるととも に、思いやりを もって相手と関 わることができ る児童の育成	友達の良さに気 付き、伝え合う 取組を行う。月 に1回の「なか まタイム」、たて わり掃除等を実 施し、他者と関 わる場を設定す る。教職員間で 学級経営につい て分析・交流し 合う研修を実施 する。	「周りの人から認 められることがあ る」と肯定的に答 える児童を80%以 上にする。	□アンケート項 目に肯定的に答 える児童は92% だった。職員の実 践を紹介する通 信を発行したり、 隔月1回職員全 体で学級経営研 修を行い、実践 交流をして、取 組を考える時間 を確保した。月 に1回帯タイム になかまタイム を設定した。	4	3	引き続き、職員 全体で隔月1回 の学級経営研 修を継続して いく。なかまタ イムの見直し を行い、9月か らは毎週なか まタイムを実 施する。その中 で横のつなが りを広げるレ ク、学級実態に 合ったソーシ ヤルスキルト レーニングに 継続的に取り 組む。	□アンケート項目に 肯定的に答える児童 は87.4%だった。2学 期以降はなかまタ イムを週1回設定し、 クラスレク・SSTに取 り組んだ。職員の実 践を紹介する通信を 定期的に発行したり、 隔月1回職員全 体で学級経営研修を 行い、実践交流をし て、取組を考える時 間を確保したりし た。校内委員会を月 に1回設定した。児 童会レクやたてわり 掃除など他学年と関 わる場も設定した。 ◎思いやりをもつ て他者と関わろうと する児童の姿が増えて いる。	4	3	4	自己肯定感の底上 げが必要だと感じ た。今年度のよかつ た取組(なかまタ イム、研修、生徒指導 通信の発行など)を 継続しつつ、来年度 も職員が児童理解 や実践、悩みを相談 できる研修や場で 高め合えるよう計 画し、実施する。ま た、今年度は、来年 度の本校の特別活 動のめあてを見直 すとともに、学級会 を定期的に全学級 で実施し、仲間意識 を高めていく。

	<p>新規</p>	<p>自分の身体に興味関心をもち、健康の保持・増進に向けて行動することができる児童の育成</p>	<p>年間を通してミニマラソンや大縄に取り組み、体力の向上や運動の楽しさを感じられる機会を設定する。ミニ保健やランチルーム給食を通して、児童の実態に応じた保健指導・食に関する指導を行う。</p>	<p>体力・健康に関するアンケート(運動・保健・食に関する指導の観点)から健康の保持・増進に向けた行動ができていているという児童を85%以上にする。</p>	<p>□アンケート項目に肯定的に答える児童は運動67.3%保健64.2%食56.4%であった。レク委員会が運動遊びのイベントを開催した。児童の実態に応じたミニ保健での保健指導やランチルーム給食時の食に関する指導を継続して行った。</p>	<p>3</p>	<p>2</p>	<p>運動：縄跳び大会やミニマラソンなどを開催し、体力の向上と共に、自他の体力の高まりに気付くことができる機会を仕組む。 保健：保健だよりで児童・職員に向けて健康情報の発信を行う。委員会を活用し、けが防止や手当を含む自己管理能力を育む。季節や健康の状況に応じたミニ保健を継続して行う。 食：給食放送や食育通信等を通して児童・職員共に食に関する興味関心を高め、学校組織として食に関する指導にあたる。</p>	<p>□アンケート項目に肯定的に答える児童は運動85.8%保健87.2%食86.6%であった。 運動：個々の体力向上をねらったベースランニングを実施したり、集団で運動に関われるように学校全体で大縄に取り組んだりした。 保健：保健委員会がけがの防止や手当についての知識を全校に発信した。児童の生活の様子から、季節に応じた服装や正しい姿勢についてミニ保健を通して指導した。 食：給食放送やランチルーム給食で食に関する指導を継続して行った。家庭科や生活科などの授業では、栄養教諭も授業に参加し、より専門的な知識や技能について話すことで、児童の食に関する関心を高めていった。 ◎健康の保持・増進に向けて行動できる児童が増えてきている。</p>	<p>4</p>	<p>4</p>	<p>4</p>	<p>運動・健康・食のどの観点についても、児童の関心を高めていくためには、担任だけでは十分でないため、保健主事や栄養教諭、養護教諭が教職員や児童に対して指導や声かけを意識的に行い、知識技能を伝えるようにしたことが非常に効果的だった。3観点の中で特に低かった「週3回以上の運動」「規則正しい生活」「旬や地場産物」について、今後児童へもフィードバックし、児童が自己の生活課題として意識して学校生活を送れるようにしていく。</p>
--	-----------	--	---	--	--	----------	----------	--	---	----------	----------	----------	--

3	教職員の資質・能力の向上	★	継続	子どもたちの自律を促す授業の創造	教職員が、「自律を促す授業づくり」に取り組むヒントを得られる研究授業や職員研修を計画、実施する。	学期末に、教職員に「前回の研究授業で得た学びを基に、どのような取組をしましたか」というアンケートを実施する。肯定的割合を、90%以上にする。	□肯定的割合は100%であった。教職員の主体的な授業改善につながる研修を仕組むことができている。また、5年目以上の教職員が講師となる研修を設け、具体的な改善を考えることができた。	4	4	教職員の取組が、自律を自覚できる授業づくりにつながるよう、今後も自分の取組の形成的評価ができる研修を設定したり、他校の研修に参加する機会を保障したりしていく。	□肯定的割合は100%であった。前半と同じように教職員の主体的な授業改善につながる研修を仕組むことができている。週に1回程度、教材研究の時間を設け、授業づくりに充てる時間を確保した。 ◎自律を促す授業づくりに向けて、全職員で取り組むことで、教職員の資質・能力の向上につながった。	4	4	4	引き続き教職員の主体的な授業改善につながる研修を仕組む。また、週に1回の教材研究だけでなく、月に1回以上、研究テーマに沿った理論研修や実技研修を行い、内容を充実させていく。
3	地域に貢献する学校		継続	持続可能な社会について探究し、地域に還元する児童の育成(SDGs)	生活科の学習や総合的な学習の時間に、地域に根づいた持続可能な社会づくりについて学び、実践をする。	児童アンケート「持続可能な社会づくりのために自分達ができる事に取り組んでいる」に対する肯定的割合を80%以上にする。	□肯定的割合は77%であった。取り組んでいる内容を、他学年や学校全体に発信するなどして、児童が学習を通してSDGsを取り入れることができている。	3	3	取り組んでいる内容を、継続して他学年や学校全体に発信していく。また、SDGsに対する意識を生活の中でより高めていく。	□肯定的割合は85%であった。前半と同様、取り組んでいる内容を、他学年や学校全体、地域に発信した。 ◎持続可能な社会づくりに向けて、自分たちで計画し、行動に移すことができた。	4	4	4	引き続き地域に根づいた持続可能な社会づくりについて考え、実践していく。また、学年間で既習事項を積み上げられるようにカリキュラムマップを見直し、位置付けていく。

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]		
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	達成度	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。